

K-610

延沢城跡発掘調査報告書

— 第1次調査 —



2007.3

尾花沢市教育委員会

例　　言

1. 本書は、山形県尾花沢市大字延沢地内に所在する国史跡延沢銀山遺跡（延沢城跡）の発掘調査報告書である。調査費は国庫補助金を受けた。
2. 調査要項は下記のとおりである。

調　　査　　期　　間　　平成18年8月28日～9月24日

調　　査　　面　　積　　約98m²

調　　査　　主　　体　　尾花沢市教育委員会

調　　査　　委　　員　　会　　仲野　浩（元文化庁主任調査官）　藤木久志（立教大学名誉教授）

田中哲雄（東北芸術工科大学教授）　保角里志（日本考古学協会会員）

角屋由美子（上杉博物館主任学芸員）

事　　務　　局　　教育長　　鈴木　忠　　社会教育課長　小松良雄

補佐兼文化財係長（調査員）　大類　誠　　文化財係　椿井達也

発掘作業従事者　有路秀男　大沼辰治　高橋一夫　鈴木理矩治郎　斎藤英夫

整理作業従事者　河村由香里　永沢多恵子

3. 本書の執筆と編集は大類誠が担当した。

4. 発掘調査及び報告書作成にご協力・ご指導いただいた方及び機関は下記のとおりである。ここに記して感謝申し上げる。（順不同・敬称略）

横山光弘・常盤中学校・教育やまがた振興課文化財保護室・延沢城跡保存会・尾花沢市文化財保護委員会

5. 調査に関する写真・図面及び出土品は、尾花沢市教育委員会が一括保管している。

凡　　例

1. 本書で使用した遺構・遺物の分類は下記のとおりである。

S B - 挖立柱建物跡 E B - 遺構内柱跡 S P - 小穴 S D - 溝跡

S X - 性格不明遺構 R P - 土器・陶磁器 R Q - 石製品 R M - 金属品 R T - 陶磁器

2. 遺構配置図の縮尺は図に示した。遺物実測図は2分の1の縮尺とし、遺物分布状況図・図版は任意とした。

目　　次

I 調査の経緯	1	IV 出土遺物	6
II 遺跡の立地と環境	3	V まとめ	7
III 検出された遺構	3		

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

昭和60年12月21日、①銀山廃坑を中心とする東山地区、②山神社地区、③野辺沢氏の居城とされる延沢城跡の3箇所が延沢銀山遺跡として史跡に指定された。その後、平成元年に『史跡延沢銀山遺跡保存管理計画書』が刊行され、延沢銀山遺跡の保存・管理・整備・活用について、今後の方針が打ち出された。

しかし、この計画書は銀山廃坑が中心で、延沢城跡の保存・管理・整備・活用については若干触れる程度であった。国史跡指定20年を迎えるにあたり、より充実した延沢城跡の保存管理計画を求める機運が高まった。

そこで、延沢城跡保存管理策定委員会を設置し、平成15~17年度の3カ年にわたり、延沢城跡の保存管理計画書を作成した。

策定委員会では、自然・歴史的景観の実態、延沢城跡の縄張図、延沢城及び野辺沢氏に係わる文献、延沢城下の町割、石造文化財等々の基本調査を実施し、今後、保存・管理・整備・活用をどのように進めていくか論議され、その方針が打ち出された。今回の発掘調査も保存・管理・整備・活用を踏まえた上で実施する。

延沢城跡にどんな建物があったのか、それを知るような具体的な資料は非常に少ないが、保科家が記した『家世実記』(寛文13年)に、改易後15年ちかく経った城跡の荒廃した様子を次のように記している。「延沢御城は誰方より受取候裁不明、(中略) 延沢御城之儀何成共道具無之、本丸屋形殊之外損シ、兩不洩座敷一ヶ所も無之、障子戸も直成所不相見、書院と見へ候處ニは疊有之、其外は古薄縁を敷、二ノ丸ニ有之候四軒敷物も無之、(以下略)」、主を失った城跡の無残な情景である。記述から読み取ることができるのは、書院造りの建物を含む館が本丸に存在したことである。

また、市所蔵の絵図面『羽州野邊沢霧山之城』に、「二重ノ矢倉」と「ムマヤ」と称する白堀の2棟の建物が本丸周辺に描かれている。さらに、『延澤軍記』(龍護寺本)には「本丸ハ長サ百間二、幅八拾間二餘り、臺所ハ一段下テ幅七間、長サ三拾間、築地堀・櫓四方二構、大門ニヶ所、堀地門ニヶ所、其外門戸八ヶ所有、(以下略)」などと記され、様々な施設があったようである。しかし、これらの実態は不明である。

今年度から始めた発掘調査はこれらのことと念頭に入れ実施した。

2 調査の経過

調査期間は平成18年8月28日から同年9月24日の延べ21日間である。当初、①山形県の天然記念物に指定されている大杉の西側と、②10数年前冬の大風で杉林の1本が倒れ、岩盤に掘り込んだ遺構が露出してしまった杉林区の2箇所を発掘調査する予定であった。しかし、杉の専門家から大杉周辺は広く根を張っていること(特に日当たりのよい西側の草地)や大杉自身が弱っており、発掘調査は慎重を期する意見があったので、このことを考慮し今年度は調査を見送ることとした。

平成18年度は杉林地区について重点的に調査を実施した。杉の合間をぬい、T字型の2m幅のトレンチを設定したが、いたるところに風倒木があり、それを除去するのに時間を費やした。下草や風倒木を除去すると3箇所に集石ブロック現れる。集石を残しながら表土を剥ぐが、表土というより草木の根や腐殖土の層で若干土が混ざっているという状態であった。この表土を剥ぐと岩盤が顔をだした。この時点で集石ブロックが二次的な集石と判断し除去する。

その後は岩盤を傷つけないように刷毛と竹箒・移植コテを使い掘り下げていく。廃土は埋め戻しのことを考え土と岩盤破片を分別した。

調査面積は98m²である。うち北区のトレンチは18m²表土を剥いだけで終了する。南区10m²、西区18m²は遺



第1図 国史跡延沢銀山遺跡平面図（延沢城跡）S = 1 : 6,000

構の平面プラン確認で止めている。精査を実施したのは中央区52m²の面積で完掘する。特に中央区は岩盤を削り掘り込んで遺構が築かれている。岩盤や礫類が無秩序に広がっているため、何がどうなっているのかわからない状態であった。それよりさらに5cmほど掘り下げるに、礫類が累々と現れてきた。この段階で古い時期に整地されているのではないかと考えられた。次にこれらの礫をすべてはずし精査すると遺構のプランを確認することができた。遺構平面プランの切りあいは容易にわからず、半割し図面をとって完掘した。

次年度の調査のため完全な埋め戻しは行わず、西区・南区はブルーシートで覆い、中央区は倒木を利用して遺構全体を覆い、さらにその上にブルーシートをかけて保護した。どうしても露出してしまうところは、落ち葉をかき集めそれを遺構内に入れて、冬の凍結防止・溶解による遺構の破壊を避けた。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

延沢城跡は山形県尾花沢市大字延沢字古城山・三ノ丸・道清沢・千貫森・堀切などに所在し、指定面積は78haに及ぶ。尾花沢市役所から直線距離にして南東方向に6.5kmの位置にある。本丸付近で標高約296mをはかる。本丸から北へ345m、東へ200mとし字型に主要な曲輪群が形成されている。城跡の主要な部分は植林された杉林で覆われ、ブナ林が入り混じる。遺跡全体もブナ林と杉林が混在している状況である。

2 歴史的環境

延沢城が築城された時期は文献により諸説あるが16世紀後半以降17世紀以前と考えられる（改築が行われたため現況として残っている曲輪群は17世紀初頭と考えられる）。築城したのは延沢城主初代の野辺沢庵摩守満重で、能登守満延、遠江守光昌の三代にわたって居城となったといわれている。

延沢城の本丸を中心とした主要な曲輪群を回ると、周囲の北側に存在する母袋櫓（落合櫓）・高橋櫓・行沢櫓・押切櫓・砂山櫓・北郷櫓・二藤袋櫓・森岡山櫓などの櫓跡群を望むことができる。北西の尾花沢方面を一望でき、目前に荒廃櫓跡が控えている。

また、遺跡の周辺には野辺沢氏と縁が深い龍護寺や普法寺・金城寺・円照寺、県指定天然記念物の大杉、市指定天然記念物のコウヤマキ・イヌザクラ、市指定建造物の龍護寺の山門（延沢城の大手門を移築したものと伝えられている）、室町時代の建造物と伝えられる六沢の繁沢観音堂、県指定絵画の漆書絵馬（円照寺蔵）、荒町八幡神社に奉納された紙本絵馬、三日町福荷神社と龍護寺境内の室町期の板碑など、多くの文化財が見られる。さらに、延沢城跡下に帯状に形成された三日町・九日町は町割がなされた駅並みと考えられる。

一方で、延沢城が築城する前まで居住していたと伝えられる本町には板碑群が存在し、古殿にも古屋敷という地名が残っているなど、延沢城前史を考える上では見逃せない事柄であろう。

III 検出された遺構

先にも述べたように、北区は表土を剥いだけ、南区と西区は遺構の平面プラン確認のみ、精査したのは中央区のみである。検出した遺構はBE12基、SP17基、SX2基、SD1基の合計32基である。中央区の遺構のはほとんどが地盤の岩盤を掘り込んで構築している。精査した区域の面積が52m²と狭い面積に遺構が集中しているため、全体像が見てこないが、現時点で考えられることを述べてみたい。

1 挖立建物跡

E B 1 ~ 7 · 14 · 17 · 22 · 23 · 29は掘立建物跡の柱穴と考えられるが、柱穴群がどのように組み合わされるのか明確なことはいえない。これを柱穴とした理由は E B 2 から長さ30cm、直径10cmの炭化した木柱根が出土したので、このような遺構は掘立建物跡の柱穴と判断した。E B 2 を精査すると木柱を埋める際、周りを青粘土で突き固めて埋め込んでいる。木柱が検出されたのはこの遺構からだけで、他からは検出されなかった。

E B 2 のように、まず周囲を方形に大きく浅めに掘り込んだあと、次に木柱を埋め込む柱穴を段階的に掘り込むパターンは E B 1 · 6 · 7 · 14 · 17 に認められる。

また、E B 3 のように長方形に単純に掘り込むパターンも認められる。E B 4 · 5 · 29がその例と考えられるが、木の根によって破壊されているので確定なところはわからない。E B 22 · 23も南北分が風倒木で破壊されており、どちらのパターンであるかは決めかねる状況である。

柱間は E B 1 - E B 2 、E B 3 - E B 6 、E B 4 - E B 7 、E B 22 - E B 1 、E B 29 - E B 4 では130cm、E B 1 - E B 3 - E B 4 、E B 2 - E B 6 - E B 7 では220cmである。

2 小 穴

S P 25は長軸66cm、短軸60cmの隅丸方形気味の深さ20cmの小穴で、丸整痕が明瞭に残っている。底面は丸底である。S P 9 · 10は長方形に掘られたなかに、円形の小穴が掘られたもので深さ18cmである。S P 11の覆土は黒色土で炭化物を大量に含み、小穴付近及び中が被熱している。深さは11cmほどで浅い。また、S P 24のように底面がラッスコ状になっている遺構も認められる。その類例として E B 29 や S X 20 があげられる。

小穴とした遺構の中には柱穴も考えられるが、現段階ではどのような機能をもつ小穴であるかは不明である。

3 溝 跡

S D 28は溝跡と考えられる。E B 1 の遺構から始まり東側に一直線に伸びる。幅20cmほどで深さは E B 1 付近で30cm、S P 31付近で28cm、S P 27付近で14cm、東端で7cmとしだいに浅くなる傾向がある。

4 性格不明遺構

S X 20は、平面プランが長軸164cm、短軸152cmの隅丸方形で深さ100cmをはかる。西側の底面に径40cm、深さ16cmの円形の小穴が掘られている。小穴の覆土は灰が中心で炭化物も含まれていた。

S X 19は、S X 20と同様な形態をもつ遺構と考えられる。底面南側に小穴がみられる。

また、S X 19 · 20の東側に S P 32 · S P 15 · S P 16 · E B 17 · S P 21 · S P 18が南北に並ぶように、確認された。

5 西 区

西区は遺構の平面プランを確認して終了したが、中央区と同様岩盤を掘り込んでいると考えられる。北側壁際に岩盤を掘り込んだ柱穴のような遺構を確認したが、今後の調査で明らかにしたい。平面プランからすると S X 19 · 20の性格不明遺構に類似する。

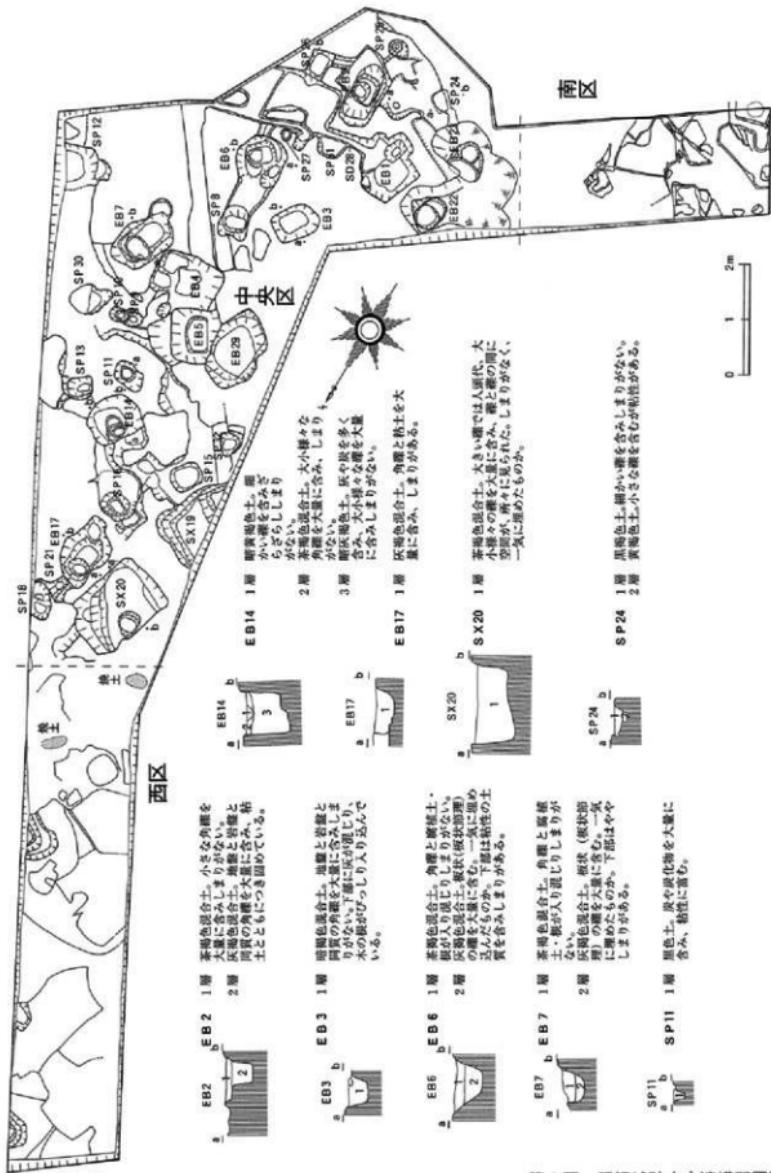
また、S X 20の西側の2箇所に焼土のブロックが確認されたが、岩盤を含めこの一帯が幅広く被熱している痕跡が確認された。

6 南 区

南区も遺構の平面プランを確認して終了した。E B 22 · 23の南側に岩盤のみられない粘土主体の地山をはさんで、岩盤主体の遺構が中央区・南区と同様に確認される。岩盤には丸整痕が明瞭に認められるが、小穴や掘立建物跡のような柱穴跡は認められない。岩盤全体が炭化物を含む黒色土で覆われている。

以上、ごく簡単に触れてきたが、全般的にいえることは、地盤である凝灰岩質の岩盤は風化が進み、さらに

III 検出された遺構



第2図 延沢城跡本丸遺構配置図

風化し脆くなつた岩盤の亀裂に杉や雜木の根が入り込み、遺構の破壊を進めていることで、今後も破壊は進行するであろう。

IV 出土遺物（第4図・第5図）

出土した遺物は、陶器が34点、磁器3点、基石（玉石）4点、砥石2点、石製品2点、古銭2点、鉄製品（刀子）2点、銅製品1点、金環1点、木柱1本である。

遺物が出土した層位は表土を剥いた段階で出土したものが多い。遺構内出土の遺物はEB1の覆土から唐津焼の皿の口縁部破片が1点、第4図の4で示した完形品の唐津焼ぐらいのもので、遺構と絡むものは少ない。遺物の分布状況をみても密度は低く、何らかの傾向をとらえることは困難である。調査区内の実線で結ばれているものは互いに接合した例で、破綻で示したものは同一個体であるが接合しない例である（第3図）。

1 陶 磁 器

1は、推定口径28.3cmの擂鉢破片である。別々に出土したのが接合した。色調は茶褐色で釉薬はかけられていない。2は口径7.6cmの小鉢である。底部は回転糸切りで炭化物の付着が見られる。3は推定口径13.3cmの皿で、同一個体と思われる破片が5片出土し、うち2片は接合した。口唇部に特徴があり、いわゆる溝縁皿といわれるものである。

4はEB1及びEB2の近くから伏せた状態で出土した完形品の唐津焼の皿である。口径10.8cm、底径3.5cm、器高3.6cmを測り、高台は削り高台。見込みに3箇所の砂目のあとが付いている。この皿に顯著にみられるのは、口唇部に炭化物が付着していることである。出土状況を丁寧にみていくと、皿が出土した場所は周りの岩盤を半円状に10cmほど掘り込んで、さらに皿を取り囲むように5~6個の小穴が掘られている。遺構の性格や皿の機能を考える上で注意したい事実である。

5は推定口径12.6cm、器高3.5cmの皿である。見込みに2箇所の砂目の痕がみられる。高台は削り高台で砂がびっしりと付着している。溝縁皿の仲間と考えられる。

6は推定口径12cm、器高3.2cmの皿である。内面に段があり高台は削り高台である。

これらのはか、圓化しなかつたが染付けの小破片が3点出土し、薄手の上手ものである。写真ではわかりにくいか、2点は高台の高さが0.2~0.4cmと低い中皿と考えられる。もう1点は厚さが0.2cmにもみたない薄手のもので、器形は向付のようなものと考えられる。

2 鉄 製 品・金 環・古 銭

7は鉛石を溶かしたときに出た屑、いわゆる金環と考えられる。1点出土したが、周辺の遺構を考える上で注意したい遺物である。

8は現存長4.6cm、幅1cmの鉄製刀子と考えられる。刃部先と基部を欠いている。9も8と同様な鉄製刀子と考えられ、現存長3.1cm、幅1.2cmをはかる。刃部先と基部を欠いている。

10は景徳元寶（1004年）、11は熙寧元寶（1068年）でいずれも北宋銭で1点ずつ出土している。これらのほか銅製の非常に薄い板状の製品が出土している。

3 石 製 品・砥 石・基 石

12はEB22南側の風洞木で搅乱された中から出土した。現存長20cm、幅16cm、厚さ8.5cm、約3分の1が欠損する。長方形に荒削りした軟らかく粗めの砂岩質の石材で、中を平盤でU字形に削り取っている。内部は黒く焼けている。

13は何であるか判断できないが、大胆に推測すると全体が方形を呈し、4本の脚が付いた手水石のようなものではないかと考えられる。脚は平盤で丁寧に成形された痕跡が残っている。

14は長さ12.6cm、幅5cm、厚さ4cmの目の細かい砂岩質の砥石である。側面にも砥面がある。

15も長さ10.3cm、幅4cm、厚さ3cmのやはり目の細かい砂岩質の砥石である。砥面が6面あり全面が砥石として使われている。図面の上部にU字型の溝が2本平行に刻まれている。

16~19は恭石と考えられる。形態は橒円形を呈し、長径1.7~2.4cm、短径1.4~2.2cm、厚さ0.6~1.3cmで、18は、灰褐色の石英質の石材で、ほかは黒色の石材である。

V まとめ

1 遺構について

平成18年度は延沢城跡の本丸東側を調査したが、杉林の中で木々の間をぬってという制限もあり、遺構の性格を明確にするまでにはいたらなかった。ここでは、調査事実を列記して今後の調査分析の課題としたい。

(1) 中央区で確認された遺構は32基で、その内容は掘立建物跡の柱穴、小穴、溝跡、性格不明遺構である。

これらの遺構はほとんどが地盤である岩盤を掘り込んで構築されている。西区・南区を含め、岩盤が黒く焼けている箇所が多く認められる。西区には焼土も認められる。また、遺構の覆土を観察すると自然に埋没したのではなく、人為的に埋められている。

(2) 遺構の配置をみると遺構相互の関係について解釈に無理が出てくるので、検出された遺構が同一時期とは考えにくく、時間差があるため遺構は重複していると考えられる。

(3) 岩盤の遺構の構築に丸盤と平盤の両方が見られ、丸盤が多用されているがその違いは何か。時期差や使い分けがあるのか。

(4) 遺構が焼けている部分があると同時に、炭化物が付着している唐津焼が6点、被熱による破損の唐津焼が1点出土するが、何を意味しているのか。

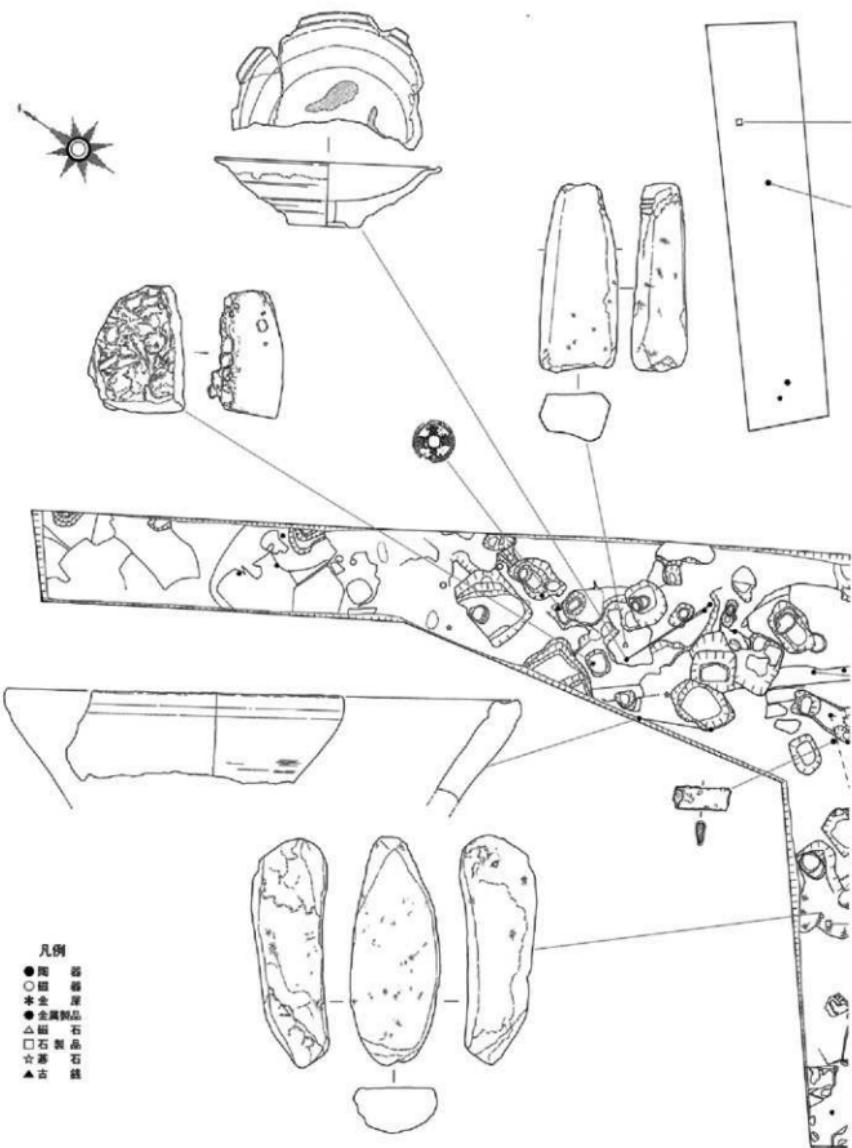
(5) 金庫は製鉄に関連する遺物であることからどのように解釈するのか。

(6) 唐津焼の特徴をみると、溝縁皿が見られることから、その時期は1600年代~1620年代と考えられる。

今後、発掘調査を進めるにあたりこれらのこと念頭に入れ、さらに情報収集や整理分析を進め遺構や遺物の理解をしていかねばならない。

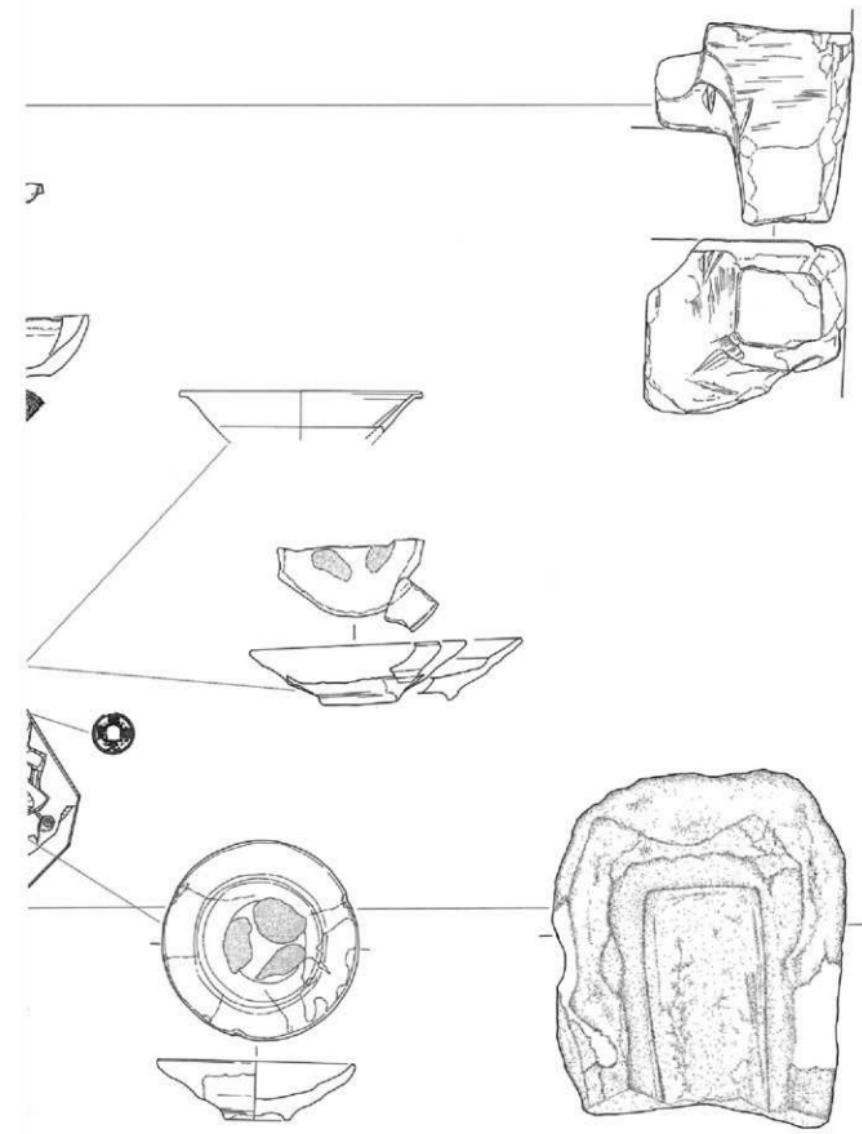
参考文献

- 1978 読売新聞社 「やきものの潮流を訪ねて「大唐津展」」
- 1989 尾花沢市教育委員会 「史跡延沢銀山遺跡保存管理計画書」
- 1992 山形県教育委員会 「蘿島城跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財報告書第181集
- 1999 勝山形県埋蔵文化財センター 「米沢城発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター報告書第66集
- 2001 勝山形県埋蔵文化財センター 「白鳥城跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター報告書第85集
- 2001 平凡社 別冊太陽「古唐津」
- 2004 財団法人出光美術館 「古唐津」

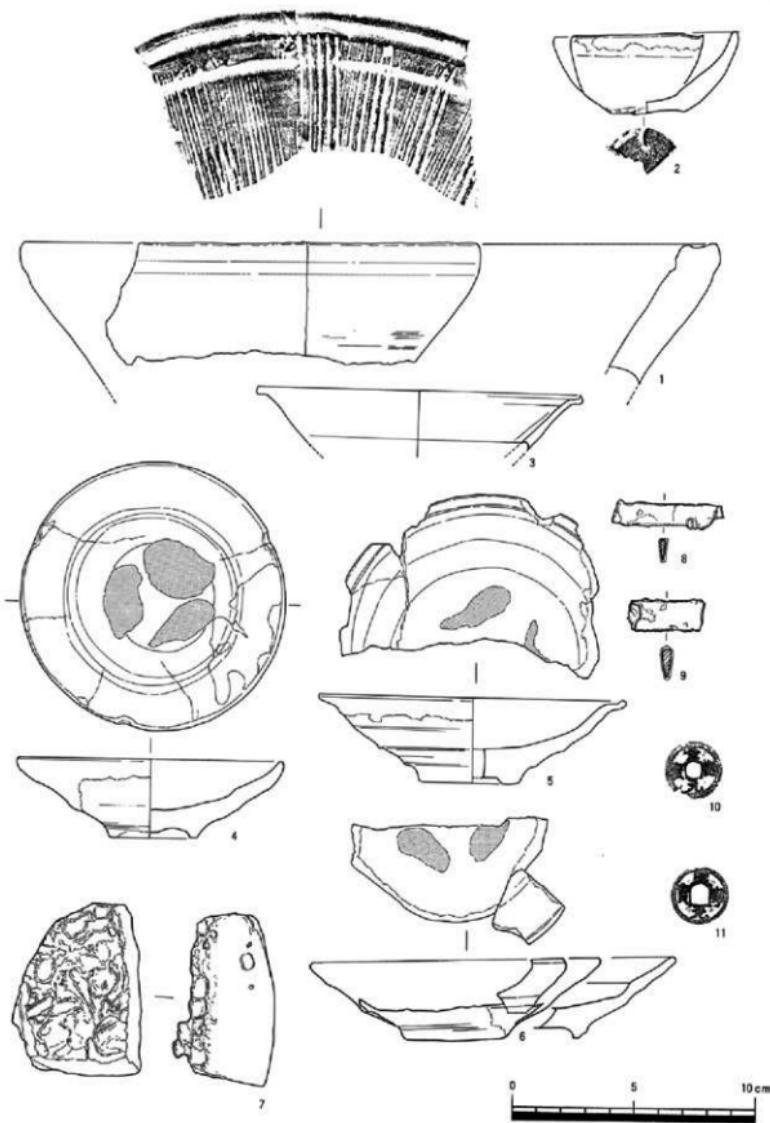


凡例

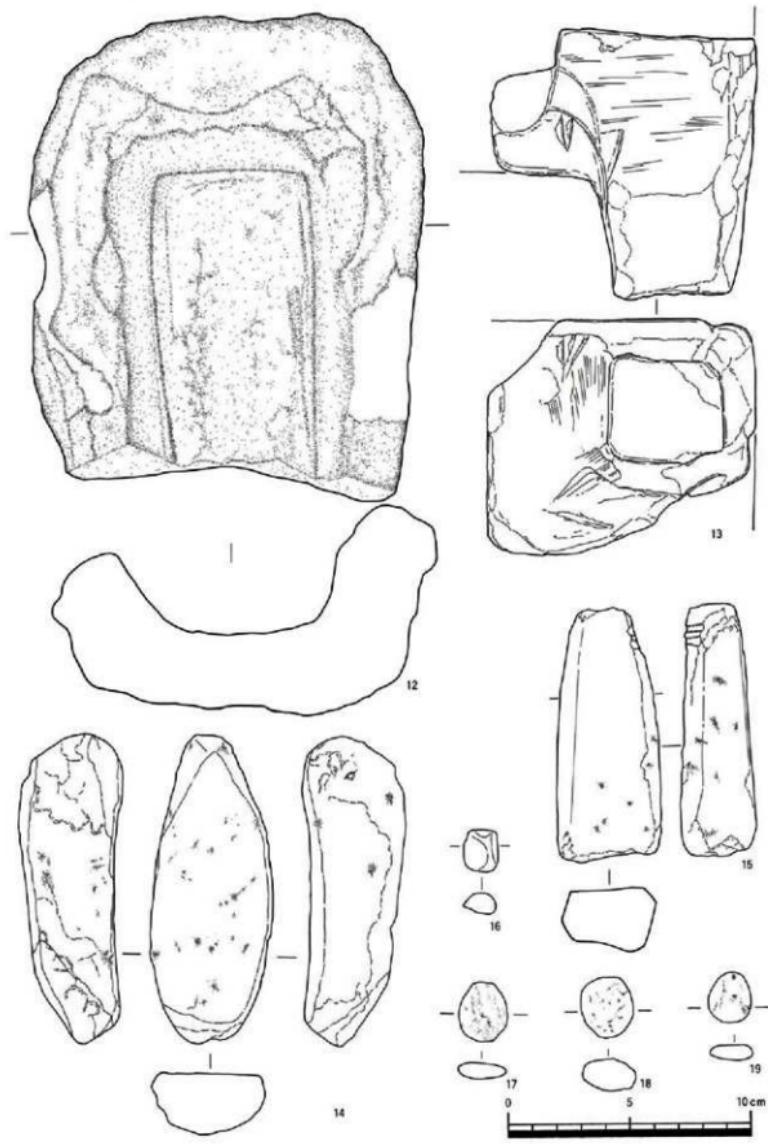
- 圈 器物
- 圈 器物底
- △ 木 木
- △ 金属 铁品
- 石 岩石
- ▲ 古 古墓



第3図 遺物の分布状況図



第4図 遺物実測図(1)



第5図 遺物実測図（2）



▲唐津焼出土状況



▲墓石出土状況



▲唐津焼出土状況



▲鉄製品（刀子）出土状況



▲唐津焼出土状況



▲古銭出土状況



▲唐津焼出土状況



▲木柱（E B 2 より出土）



▲遺構検出状況（中央区）



▲南区の検出状況



▲遺構検出状況（中央区）



▲E B 3のプラン確認状況



▲S X 19・20周辺



▲E B 7のプラン確認状況



▲西区の検出状況



▲E B 7の完掘状況



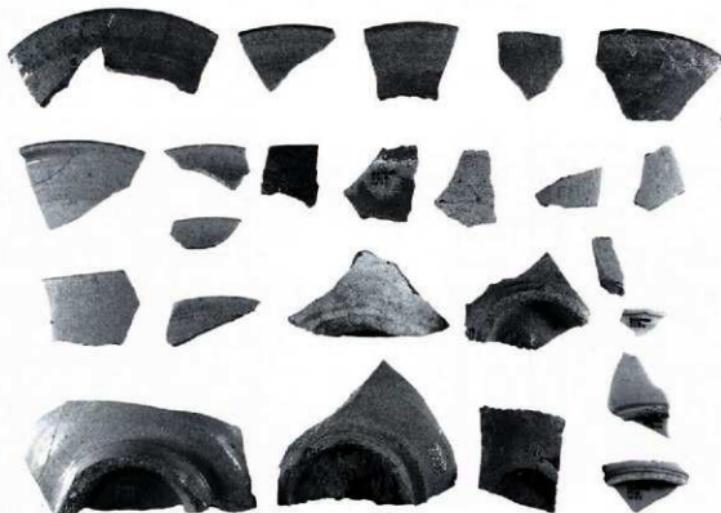
唐津焼（内面）



唐津焼（外面）



唐津焼・伊万里焼（内面）



唐津焼・伊万里焼（外面）



擂鉢（内）



擂鉢（外）



石製品・硃石



石製品



基石



金属・刀子・古钱

山形県尾花沢市埋蔵文化財調査報告書第6集
延沢城跡発掘調査報告書
- 第1次調査 -

編集・発行：尾花沢市教育委員会
山形県尾花沢市若葉町一丁目4番27号
TEL 0237-22-1111㈹

印 刷：大場印刷株式会社
山形県山形市立谷川二丁目485-2
TEL 023-686-6155㈹